

あたり前の生活を送るために

芦北町立佐敷中学校 2年 立杉 優海

二〇二〇年、七月。私の住む芦北町に大きな水害が起こった。この日を境にあたり前があたり前でなくなった。私の家は、玄関前までですみ、家族みんなで避難の準備もしていたため被害は少なかった。しかし、おばあちゃんや山のふもとにある親せきの家は被害が大きかった。翌朝から近所にあるあき地には各家庭から出されたゴミの山が日々高くなっていった。水や電気も止まり、道には山から流れてきた木々や石、どろが広がっていて、所々水もたまっていた。

「これからどうなってしまおうのだろう」と不安になった。

しかし、不安で不自由な生活を過ごす中でも復興は着々と進んだ。道を通れるように整備が行われると、茶色でどろどろだった道がきれいになっていき、ゴミ収集が始まると、あっという間にゴミが運ばれて行った。三日後くらいからは、役場やお店には支援物資が並びはじめた。水が使えるようになってからは、自分に出来ることを精いっぱい頑張ってきた。

私達があたり前だと思っていたことが、実はあたり前でなく、その裏にある誰かの努力と税金で成り立っていることに気付かされた。私達が安心して暮らしているのは、私達の身を守ってくれている警察や消防、自衛隊、医療関係などの仕事も誰かが毎日努力しているということ。そして、自分の生活をふり返って見てみると、いかに税金が使われているのか驚かされる。机、教科書、テスト用紙、それに校舎まで税金で賄われていることに気付く。この水害で派けんされた自衛隊のみなさんも税金で動いてくれていたのだ。

税金がなかったら私はどうなっていたのだろうか。税金がなかったらぐっすり寝ることも道を歩くことも出来ないのだろうか。水害のおかげとは言わないが、改めて税金の大切さがわかった。自分の納めた税金が誰かの役に立っている。みんなが納めた税金のおかげで今の私達の暮らしがある。考えただけで勇気がわいてくる。だから私は、あたり前の生活を送るために、税金に感謝しつつも、将来誰かに貢献できるように努力していきたい。